

**日本英語学会
第 24 回大会資料・プログラム**

**The Twenty-Fourth Conference
of
The English Linguistic Society
of Japan**

2006 年

11 月 4 日 (土) 5 日 (日)

**東京大学本郷キャンパス
(University of Tokyo, Hongo Campus)
(〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1)**

The English Linguistic Society of Japan

お知らせ

日本英語学会・学習院大学共催

Professor Stephen Anderson
(Yale University)
特別講演会

演題

The English “Group Genitive” is a Special Clitic,
Not an Inflection

11月3日(金) 18:00 - 19:45

東京大学本郷キャンパス

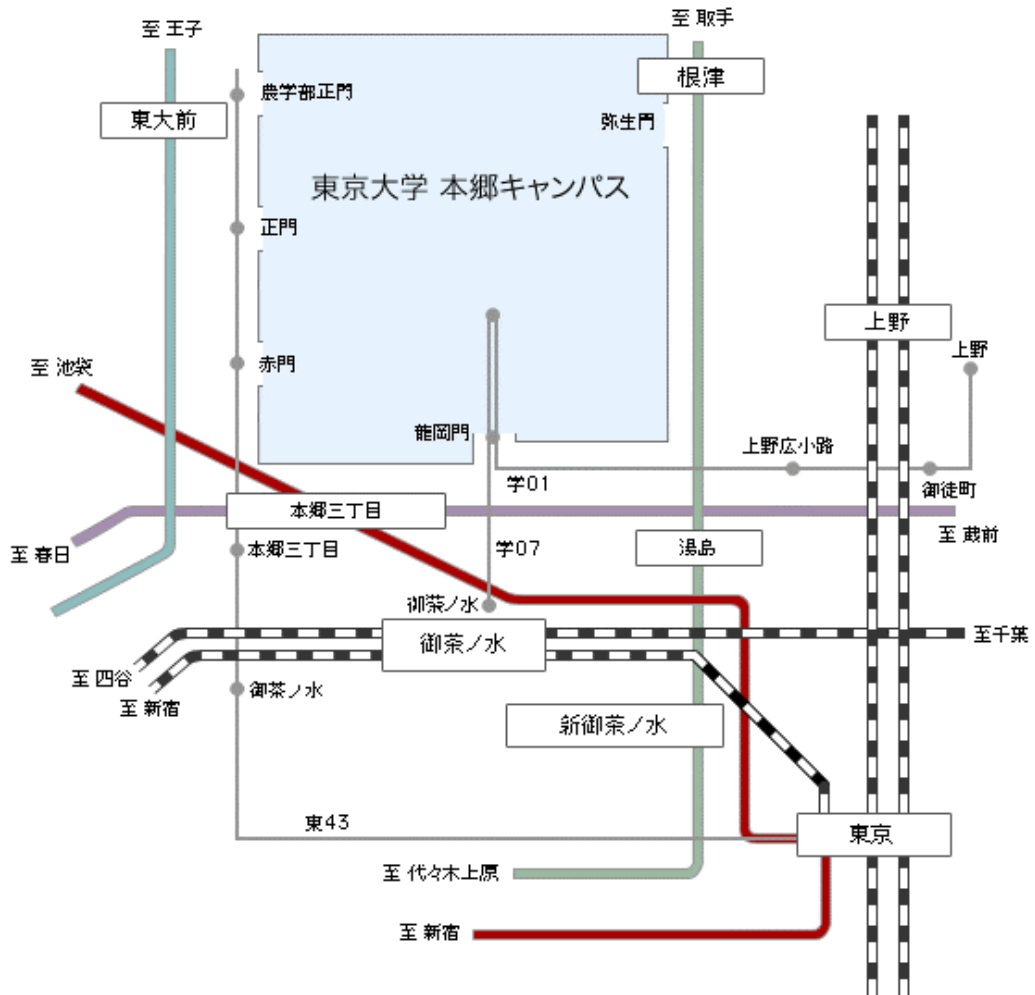
法文2号館1階3番大教室

(本冊子5頁「会場案内図」をご参照ください。)

東京大学本郷キャンパス案内図



東京大学本郷キャンパスアクセスマップ



東京メトロ丸ノ内線・本郷三丁目駅より

2番出口から出て、突き当たり本郷通りを左方向・駒込方面に進む。徒歩8～10分。

都営大江戸線・本郷三丁目駅より

3番出口から出て、右方向に進む。本郷三丁目交差点を渡り、左折。本郷通りを駒込方面に進む。徒歩8～10分。

東京メトロ南北線・東大前駅より

1番出口から出て、本郷通りを左方向・お茶の水方面に進む。徒歩8～10分。

JR 御茶ノ水駅より

<地下鉄利用> 東京メトロ丸ノ内線(池袋方面) 本郷三丁目駅下車

<都バス利用> 茶51系統駒込駅南口行または東43系統荒川土手操車場行 東大赤門前・東大正門前下車

<学バス利用> 学07系統東大構内行 東大構内下車

JR 上野駅より

<学バス利用> 学01系統東大構内行 東大構内下車

第 2 4 回 大 会 スケジュール

11月4日(土)	9:30~12:00	ワークショップ (含スチューデント・ワークショップ)
	12:00	受付開始
	12:50~13:35	総会
	13:45~16:55	研究発表
	13:45~16:30	シンポジウム
	17:40~19:40	会員懇親会(山上会館)
11月5日(日)	9:15	受付開始
	9:30~12:40	研究発表
	9:30~12:15	シンポジウム
	~13:45	<昼食>
	13:45~16:30	シンポジウム

大会運営委員

大沢ふよう(委員長) 時崎久夫(副委員長)
岡田伸夫 寺田 寛 和田尚明 越智正男 杉崎鉦司 吉村あき子
井上逸兵 小野尚之 谷口一美 田端敏幸

開催校委員

今西典子(代表) 渡辺 明 西村義樹

開催校協力委員

西尾道子 牛江ゆき子 野口 徹 牛江一裕 林 龍次郎 石原由貴

受付で大会参加費 2000 円と引き換えに、*Conference Handbook* と名札をお受け取り下さい。(非会員の方も参加できます。)

大会期間中(4日・5日)は車でのご来場はできません。

学内食堂が以下の通りご利用になれます。営業はいずれも 11:00 からです。

4日(土): 中央食堂および法文2号館地階食堂

5日(日): 中央食堂

キャンパス(校舎内および通路)は禁煙です。

会場でのトイレにつきましては、本冊子「会場案内図」や会場の掲示にて位置をお確かめのうえご利用下さい。特に法文2号館2階のトイレは数が十分ではありませんので、できるだけ1階または他棟のトイレをご利用願います。

大会期間中の緊急時電話連絡は文学部用務員室((03) 5841-3726)までお願いいたします。

会 場 案 内

東京大学本郷キャンパス (〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1)

受付	法文2号館	アーケード
本部	法文2号館2階	教官談話室
控室		
開催校(協力)委員控室	法文2号館2階	教官談話室
司会者・発表者・講師控室	法文1号館1階	115教室
一般控室	法文1号館2階	216教室
親子の部屋	法文1号館1階	非常勤講師控室
書籍展示・販売	法文1号館2階	217, 219, 210教室
	法文1号館3階	316, 317, 319, 310教室

第1日午前

<ワークショップ>

第1室	法文2号館2階	2番大教室
第2室	医学部本館3階	大講堂
第3室	法文1号館1階	113教室
第4室	法文1号館2階	215教室
第5室	法文1号館3階	315教室
第6室	山上会館2階	大会議室

第1日午後

<研究発表>

第一室	法文2号館2階	2番大教室
第二室	法文2号館1階	3番大教室
第三室	法文1号館1階	113番教室

<シンポジウム>

A室	医学部本館3階	大講堂
B室	法文2号館2階	1番大教室

第2日午前

<研究発表>

第四室	法文2号館2階	2番大教室
第五室	法文2号館1階	3番大教室
第六室	法文1号館1階	113番教室

<シンポジウム>

C室	法文2号館2階	1番大教室
----	---------	-------

第2日午後

<シンポジウム>

D室	法文2号館2階	1番大教室
E室	法文2号館2階	2番大教室
F室	法文2号館1階	3番大教室
G室	医学部本館3階	大講堂

総 会

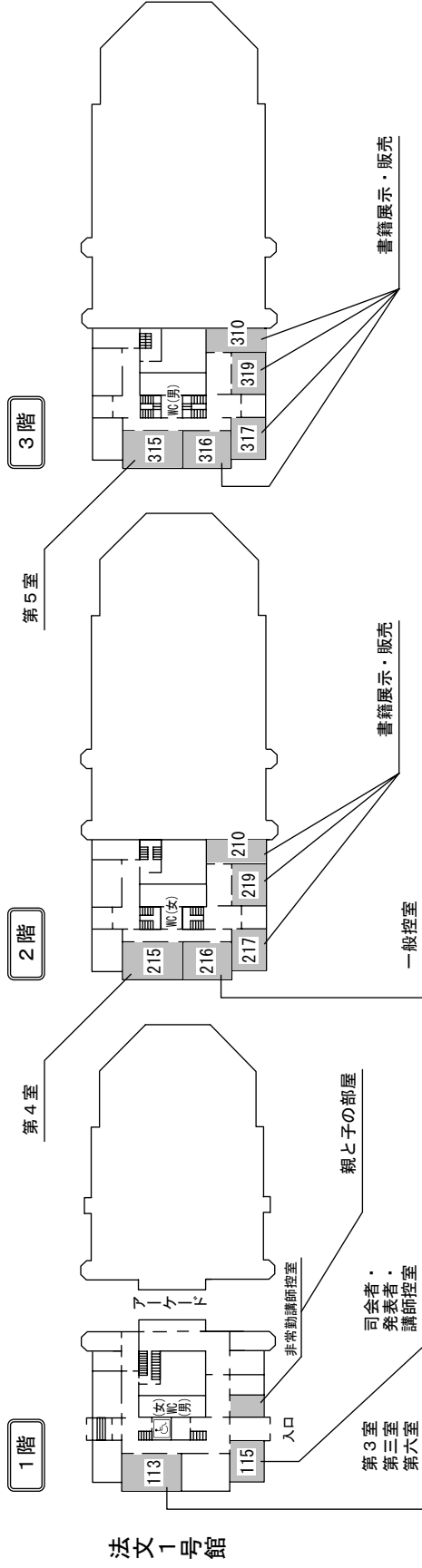
日時：11月4日(土)12時50分より13時35分まで
場所：法文2号館2階 1番大教室

会員懇親会

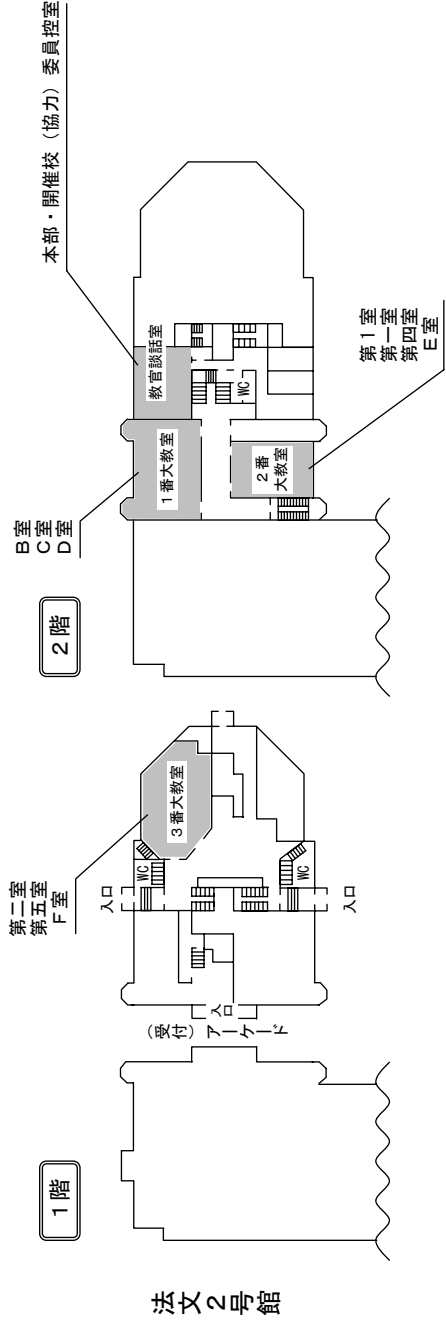
日時：11月4日(土)17時40分より19時40分まで
場所：山上会館(本郷キャンパス内) 地階食堂
会費：4,000円(学生3,000円)

会場案内図

(法文1号館・法文2号館)



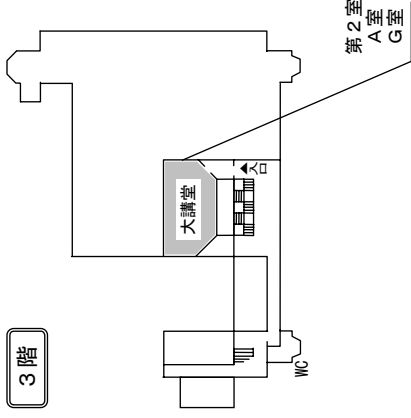
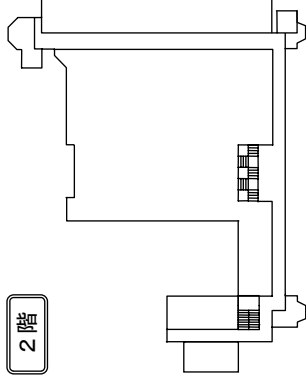
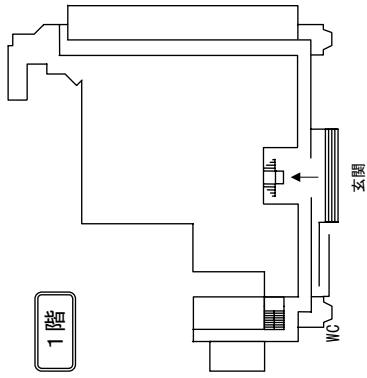
法文1号館



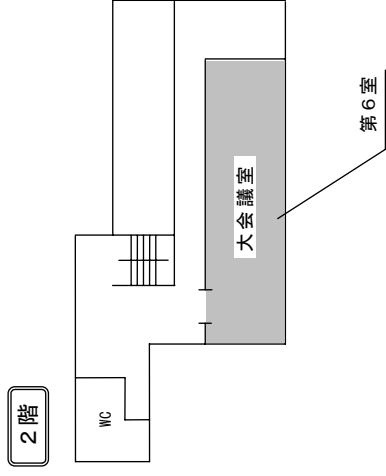
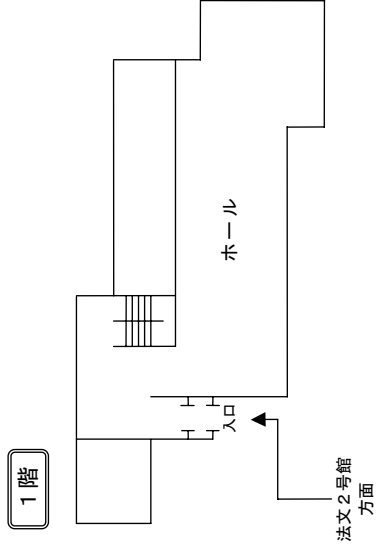
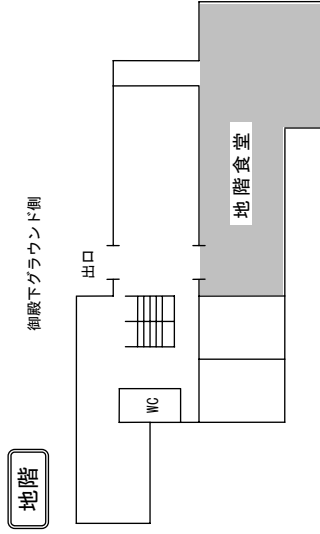
法文2号館

会場案内図

(医学部本館・山上会館)



医学部本館



山上会館

第 24 回 大会 プログラム

日本英語学会

第 1 日 11 月 4 日 (土)

ワークショップ 9 時 30 分より 12 時まで

第 1 室 言語現象の「内」と「外」 (法文 2 号館 2 階 2 番大教室)

企画者 坪本篤朗 (静岡県立大学)

第 2 室 前置詞の意味, 助詞の意味 (医学部本館 3 階 大講堂)

企画者 加藤鉦三 (信州大学)

スチューデント・ワークショップ 9 時 30 分より 12 時まで

第 3 室 構文の機能とその動機付けについて 意味論・語用論からのアプローチ

(法文 1 号館 1 階 113 教室)

企画者 田村敏広 (筑波大学大学院)・小深田祐子 (筑波大学大学院)

第 4 室 形容詞の意味と構文 (法文 1 号館 2 階 215 教室)

企画者 神谷 昇 (神田外語大学)

第 5 室 プラクティス・アプローチによる日英語ディスコース対照研究

(法文 1 号館 3 階 315 教室)

企画者 植野貴志子 (日本女子大学大学院)

第 6 室 Binding Theory の過去・現在・未来 (山上会館 2 階 大会議室)

企画者 後藤さやか (関西学院大学大学院)

このワークショップのプログラムは応募された企画書に基づくものです。

正式なタイトル, 発表者については別紙のワークショップ・プログラムをご覧ください。

受 付 正午より (法文 2 号館 アーケード)

総 会 12 時 50 分より 13 時 35 分まで (法文 2 号館 2 階 1 番大教室)

開会の辞 会 長 千葉修司 (津田塾大学)

開催校代表挨拶 東京大学文学部長 高橋和久

委員会・事務局報告

大会運営委員会報告 委 員 長 大沢ふよう (東海大学)

編集委員会報告 委 員 長 米山三明 (成蹊大学)

事務局報告 事務局長 鈴木 猛 (東京学芸大学)

学会賞授賞式

新人賞選考委員会報告 委 員 長 今西典子 (東京大学)

新人賞授賞 (該当作がある場合) 会 長 千葉修司 (津田塾大学)

研究発表 13時45分から16時55分まで

第一室

(法文2号館2階 2番大教室)

司会 内堀朝子(日本大学)

13:45 菅野 悟(東北大学大学院) “The Strength of Phases and a Typology of Clauses”

14:20 中村浩一郎(広島女学院大学) “Long Distance Scrambling as a Focus Movement”

14:55~15:10 休憩

司会 有村兼彬(甲南大学)

15:10 宗正佳啓(福岡工業大学) “Origins of Null-That Clause”

15:45 水口 学(獨協大学大学院) “Derivational Explanation of ‘That-Trace’ Effect”

16:20 戸澤隆広(東北大学大学院) “On Free Relative Clauses”

第二室

(法文2号館1階 3番大教室)

司会 野村益寛(北海道大学)

13:45 鍋島弘治朗(関西大学) 「認知言語理論におけるイメージ・スキーマと主観性
発達理論およびメタファー理論との関連から」

14:20 山本 修(大阪市立大学) 「叙述属格構文の主語に対する制約について」

14:55~15:10 休憩

司会 篠原俊吾(慶應義塾大学)

15:10 金澤俊吾(岩手県立大学) 「Way 構文における形容詞の意味的機能について」

15:45 大谷直輝(京都大学大学院) 「V + up with 構文の多義性に関する一考察」

16:20 南 佑亮(大阪大学大学院) 「難易構文における二つの解釈についての認知的考
察」

第三室

(法文1号館1階 113教室)

司会 田中伸一(東京大学)

13:45 明石博光(筑波大学) 「語彙意味とイントネーションのインターフェイス：
文副詞を中心に」

14:20 本間 猛(首都大学東京)[招聘] 「英語の多音節語の音素配列論」

14:55~15:10 休憩

司会 伊藤たかね(東京大学)

15:10 森田順也(金城学院大学) 「名詞化はどこで行われるのか？ 反語彙主義モデル」

15:45 江連和章
(神奈川県立外語短期大学) 「日英語の事象無効化現象」

16:20 福井龍太(筑波大学大学院) 「動詞不変化詞構文：語順と熟語性とのかわり」

シンポジウム 13時45分から16時30分まで

A室 極小主義理論の新展開と歴史言語学：言語変化における機能範疇の役割

(医学部本館3階 大講堂)

司会 田中智之(名古屋大学)

講師 榎田裕加(中部大学) 「主語の認可と機能範疇の素性変化」

講師 宮下治政(鶴見大学) 「目的語の認可と機能範疇の素性変化：目的語転移を
中心に」

- 講師 水野江依子(名古屋工業大学) 「定形節における機能範疇の出現:文副詞の認可を中心に」
- 講師 田中智之(名古屋大学) 「非定形節における機能範疇の出現」

B室 会話の構造と文法:コンテキストにやさしい文法研究の試み

(法文2号館2階 1番大教室)

- 司会 山口治彦(神戸市外国語大学)
- 講師 山口治彦(神戸市外国語大学) 「話法の4分類と人称的対立」
- 講師 定延利之(神戸大学) 「体験と知識の文法」
- 講師 岩崎勝一(国際基督教大学/UCLA) 「多重文法仮説:英語受動文の考察」
- ディスカッサント 高見健一(学習院大学)

会員懇親会 17時40分から19時40分まで
 山上会館 地階食堂 会費:4,000円(学生3,000円)

第2日 11月5日(日)

午 前

受付 9時15分より (法文2号館 アーケード)

研究発表 9時30分から12時40分まで

第四室(12:40終了) (法文2号館2階 2番大教室)

- 司会 天野政千代(名古屋大学)
- 9:30 牧 秀樹(岐阜大学)・ “The Theme Goal Construction in Modern Irish”
 Dónall P. Ó Baoill(Queen's University Belfast)
- 10:05 秋元実治(青山学院大学)[招聘] 「英語史における競合(rivalry)の問題について」
- 10:40~10:55 休憩
- 司会 奥 聡(北海道大学)
- 10:55 吉本真由美(大阪大学大学院) 「Comparative(Sub)Deletionについて 比較節における移動を探る」
- 11:30 江本博昭(東北大学大学院) “Ellipsis in a Single Cycle Theory”
- 12:05 長谷川信子(神田外語大学)[招聘] 「日英語のSluicing 構文と短縮疑問詞疑問文」

第五室(12:05終了) (法文2号館1階 3番大教室)

- 司会 廣瀬幸生(筑波大学)
- 9:30 森 貞(福井工業高等専門学校) 「「頻度」概念を用いた間接発話行為の再検討 “Why don't you” 構文と「なぜ~しないのか」構文」
- 10:05 西田光一(東北大学) 「日英語における指示の転移と自己表現の文法」
- 10:40~10:55 休憩
- 司会 東森 勲(龍谷大学)
- 10:55 花崎美紀(信州大学) 「否定疑問文再考」

11:30 西山佑司(明海大学)[招聘] 「変項名詞句の意味機能について」

第六室(12:05 終了) (法文1号館1階 113教室)

司会 畠山雄二(東京農工大学)

9:30 福本陽介(名古屋大学大学院) 「英語の主題句・Wh 句連鎖における容認度の多様性について」

10:05 黒木隆善(九州大学大学院) 「寄生空所構文における認可の違い」

10:40~10:55 休憩

司会 木口寛久(宮城学院女子大学)

10:55 佐藤英志(県立新潟女子短期大学) 「派生とコピーについて」

11:30 内芝慎也 「A (More Radically) Derivational Approach to the Reconstruction Effect of Japanese Scrambling」

シンポジウム 9時30分から12時15分まで

C室 音声分析ソフトPraat等を利用した音声・音韻研究：入門から最前線まで

(法文2号館2階 1番大教室)

司会 菅原真理子(同志社大学)

講師 菅原真理子(同志社大学)

「Praat を用いた音声研究の基礎：tutorial」

講師 中井さつき

(University of Edinburgh)

「日本語とフィンランド語に於ける utterance-final lengthening について(音声の長さに関する研究の方法)」

講師 石原 健(目白大学)

「Praat を用いた tonal alignment の発話研究について」

講師 新谷敬人

「Praat を用いた日本語イントネーションの知覚研究」

(University of Massachusetts at Amherst 大学院)

午 後

シンポジウム 13時45分から16時30分まで

D室 複合動詞の意味と統語

(法文2号館2階 1番大教室)

司会 由本陽子(大阪大学)

講師 星 宏人(秋田大学)

「機能範疇と複雑述語」

講師 由本陽子(大阪大学)

「複合動詞における格標示と 付与 統語的複合と語彙的複合の差異」

講師 福島一彦(関西外国語大学)

「日本語語彙的複合動詞のタイプ別生産性」

E室 コミュニケーションはいかに成り立っているか

言語システム・相互行為・身体をめぐる (法文2号館2階 2番大教室)

司会 井出里咲子(筑波大学)

講師 中川 敏(大阪大学)

「言語システムと人格問題」

講師 西阪 仰(明治学院大学)

「会話という社会的活動と言葉をめぐるいくつかの考察」

講師 砂押由佳子(群馬県立女子大学)

「使用可能なコミュニケーション方略を駆使して 在

講師 井出里咲子 (筑波大学)

「コミュニケーションにおける文化的規範 スモール
トークの事例から」

F室 Empirical Issues in Minimalist Theorizing

(法文2号館1階 3番大教室)

司会 斎藤 衛 (南山大学)

講師 野村昌司 (中京大学)

“Nominative Case licensed by non-finite T”

講師 北原久嗣 (慶應義塾大学)

“‘Conflicting’ Relations and the Derivational Model”

講師 高橋大厚 (東北大学)

“Ellipsis and the Theory of Movement”

G室 metarepresentationをめぐって

(医学部本館3階 大講堂)

司会 内田聖二 (奈良女子大学)

講師 内田聖二 (奈良女子大学)

「引用と metarepresentation」

講師 松井智子 (京都大学)

「語用論, 心の理論, metarepresentation」

講師 岩田彩志 (大阪市立大学)

「エコー疑問文と if 条件文における metarepresentation」

コメンテーター 西山佑司 (明海大学)

いった通時的事例も、上記の制約の階層差と密接に関連していることも述べる。

Origins of Phrase Structure, diss., MIT.

“Clauses without Complementizers,” *TLR* 14 “On the Distribution of Null Complementizers,” *LI* 34. “T-to-C Movement,” *Ken Hale*.

“Derivational Explanation of ‘That-Trace’ Effect”

水口 学 (獨協大学大学院)

近年の統語論研究、特に極小主義プログラム (以下 MP, Chomsky などを参照) に依拠する統語論研究では、「完璧に設計された言語能力」の観点から従来の提案が再検討され、言語現象に対してより本質的で原理的な説明を与えようとする試みがなされてきている。本発表では、「that 痕跡効果」と呼ばれている現象を考察し、MP の観点から原理的な説明を与えることを目的とする。具体的には、派生計算上で T の EPP 素性が満たされないことが that 痕跡効果を生み出すことになると主張し、理論上独立して必要な EPP 素性によってこの現象が説明されると論じる。本提案の妥当性はその正しい経験的予測によって裏付けられ、イディッシュ語などの言語を考察することによってその妥当性を示す。更に、本発表の提案が正しければ、MP に関して幾つかの理論的帰結が導かれることを議論する。

The Minimalist Program, MIT Press.

“On Free Relative Clauses”

戸澤隆広 (東北大学大学院)

Chomsky (2005)によると、移動した要素であっても、それが主要部で語彙項目ならば、投射することができる。本稿では、wh を主要部とする自由関係節と譲歩節の自由関係節は、この考えから帰結として導かれると主張する。具体的には、自由関係節において、wh と-ever は互いに独立して存在し、副詞の-ever が自由関係節の主要部で、wh が-ever へ主要部移動すると提案する。ここで、Chomsky にしたがって、wh が投射

すれば wh の範疇が自由関係節の範疇となる。一方、-ever の方が投射すれば、副詞節となり、譲歩節の自由関係節が派生する。さらに、本稿の枠組みに基づいて、wh の範疇が自由関係節全体の範疇となる事実、wh は前置詞の随伴を認めないという事実、存在構文のなかに埋め込まれた自由関係節の振る舞い、さらには whomever で導かれる自由関係節の振る舞いに説明を与える。

Chomsky (2005) “On Phases,” Ms., MIT.

研究発表 第二室 (11月4日午後)

司会 野村益寛 (北海道大学)

「認知言語理論におけるイメージ・スキーマと主観性 発達理論およびメタファー理論との関連から」

鍋島弘治朗 (関西大学)

本発表では、まず第一に、鍋島 (2003) に述べられた客観モード (以下、O モード) と主観モード (以下 S モード) の区別が主観化 (Langacker, 1990) の概念に沿って定義できることを確認する。次に、この定義による二つのモードの違いが異なるイメージスキーマ (Lakoff, 1987 ; Johnson, 1987) に関してどのような結果をもたらすか敷衍する。さらにこの O モードと S モードの起源が幼児の習得に見られることを認知発達の文献から検証し、この区別が認知的に重要な区分であることを主張する。

認知言語学論考 No.2 Subjectification. *Cognitive Linguistics. Women, fire, and dangerous things. The body in the mind*

「叙述属格構文の主語に対する制約について」

山本 修 (大阪市立大学)

(1) の叙述属格文はごく自然な文と判断されるが、(2) が容認されることはまずない。

(1) This book is John's.

(2) *That brother is John's.

この現象に関して、これまでいくつかの制約が提唱されてきたが、いずれも叙述属格

文の出現をうまく予測することができない。本発表の目的は、なぜ (1) は容認され、(2) は容認されないのかを考察することである。

どのような叙述属格文が実際に使用されているのかを観察すると、通常の文脈では、親族関係や社会的関係を表す名詞や、部分を表す名詞などのような、参照点構造に基づく名詞は、叙述属格構文の主語の位置には出現しないことが明らかになる。これらの名詞が叙述属格文の主語になれないのは、叙述属格構文もまた参照点構造に基づく構文だからである。1 つの文で参照点構造を2度も用いる必要がないため、(2) は容認されない、ということの本発表では主張する。

Taylor (1996) *Possessives in E.*, Clarendon P. Langacker (1993) "Reference-point constructions," *Cognitive Linguistics* 4.

司会 篠原俊吾 (慶應義塾大学)

「Way 構文における形容詞の意味的機能について」

金澤俊吾 (岩手県立大学)

英語における Way 構文に関して、Goldberg (1995) は、目的語名詞 way が、形容詞と修飾関係を結ぶことができることを指摘している。しかし、Goldberg (1995) の分析では、(i) 形容詞と way との意味的關係が明確にされておらず、また、(ii) Way 構文に生起する形容詞が副詞的に解釈される理由も明示されていないため、Way 構文の記述的一般化が十分であるとは言えない。

本稿では、Way 構文に生起する形容詞が、当該構文を構成しているどの要素を修飾対象としているのかを考察し、副詞を伴う表現の解釈との違いに着目することによって、当該構文内での形容詞の意味的機能を明らかにする。そして、形容詞を伴う Way 構文に与えられる解釈は、他動詞構文の中でも、とりわけ転移修飾表現 (Transferred Epithet) が生起する構文と同様の修飾関係が成立していることを主張

する。また、Way 構文において、形容詞によって表される状態と、動詞によって表される動作との間には、時間の先行関係と、事象間の因果関係がみられ、これらの関係が当該形容詞の意味的機能を考える際に重要な役割を果たしているということをも提案する。

Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure, University of Chicago Press.

「V + up with 構文の多義性に関する一考察」

大谷直輝 (京都大学大学院)

本発表では、現代英語に多く見られる V + up with 構文の多義性を認知言語学の観点から考察する。現代英語には、come up with、keep up with、put up with など動詞と up with がユニットをなし、イディオム化した例が多く存在する。本発表では、BNC で観察される上位 30 の V + up with の連続を考察対象とし、それらを2種類の下位構文に分類する。この2構文は、統語的、意味的、語源的に異なった特徴を示す。

OED が指摘するように、前置詞 with には、系統の異なる2種類が存在する。この2種類の with は、V + up with 構文の多義性に影響を与えている。with の古い意味 ('toward' 'against') は、現代英語で、up with としてユニット化した複合前置詞の中で生きている。BNC を使い V + up with の表層分布を考察することで、一見関連が見えない V + up with 構文の多義の相互関係をイメージ・スキーマのネットワークで明示する。

「難易構文における二つの解釈についての認知的考察」

南 佑亮 (大阪大学大学院)

難易構文 (= tough 構文) の to 不定詞句には自己制御的行為を表す動詞句が生起するというのが従来の定説であるが、Richardson (1985) も指摘するように miss などの失敗を表す動詞は自己制御性のテストを通過しつつも easy や hard といった一部の難易述語と

共起したときに「難易度」とは異なる解釈(=「傾向」)をもたらす。また、この種の失敗動詞は難易度以外を表す述語とは同構文において共起不可能である。これらの事実は「自己制御性」の概念では捉えきれない。そこで本発表では、同構文の述語の意味を捉えるために肯定/否定的の二項対立で成り立つ価値判断性という基準を設定し、「傾向」解釈は「難易」解釈に比べて *to* 不定詞句への依存度が高いことなどから、述語の意味が価値判断性に関して希薄化している場合に *to* 不定詞句に価値判断性を担わせる余地ができ、失敗動詞との共起可能性が高められていると主張する。

Richardson, John F. (1985) "Agenthood and Ease," *Parasession on Causatives and Agentivity*, *CLS* 21(2), 241-251.

研究発表 第三室(11月4日午後)
司会 田中伸一(東京大学)

「語彙意味とイントネーションのインターフェイス：文副詞を中心に」

明石博光(筑波大学)

Allerton and Cruttenden (1974) や Cruttenden (1984) などによれば、真偽判断の副詞(possibly, probably, certainly)のうち、ある種のものには下降上昇調を取れない。この事実に対し、本研究では、これらの副詞の音調選択は、副詞の語彙意味に還元できると主張する。すなわち、「語彙意味において、あるスケール上で極点を表すような語は、(下降)上昇調を選択することができない」という制約を立てて、副詞の音調選択が意味的要因によって説明可能な場合があることを論じる。さらに、分析対象を頻度の副詞(always, sometimes)や強調の副詞(entirely, hardly)にも広げ、この制約の妥当性を裏付ける。また、副詞の意味と下降上昇調の持つ意味の関連性を考察することにより、なぜ上記の制約が存在するのかについても説明を与える。

"English Sentence Adverbs," *Lingua* 34, 1-30. "The Relevance of Intonational Misfits," *Intonation, Accent and Rhythm*,

10-19, Walter de Gruyter.

「英語の多音節語の音素配列論」

本間 猛(首都大学東京)

従来の音節の研究は、ほとんどが一音節語を元に議論を進めている。しかし、英語の特徴を本当の意味でつかむには、多音節語の研究を進める必要がある。英語の多音節語は、様々な要因のために非常に複雑な様相を呈していて、一筋縄では行かない。そこで本発表では、特に、単一形態素からなる強弱脚の二音節語に焦点を当てる。本発表では、(1) 実在の多音節語は、可能な一音節語の連鎖として分析可能か(分析可能性)、(2) 実在の一音節語の連鎖は、可能な単語か(連鎖可能性)、(3) 音節に基づいて、可能な語をすべて定義し、不可能な語をすべて排除するような仕組みが可能か(定義可能性)の3つの問いを検討する。結論として英語は、分析可能性はあり、連続可能性は過剰であり、定義可能性は部分的である。ここで音節とは、あくまでも、音素配列にかかわる音韻論的考慮に基づくもので、音声学的な音節や分綴法上のそれとは、必ずしも一致しない点に注意してほしい。

司会 伊藤たかね(東京大学)

「名詞化はどこで行われるのか？」

反語彙主義モデル」

森田順也(金城学院大学)

統語論と形態論に密接に係わる名詞化に関しては、これまでに種々の立場から数多くの提案がなされてきたが、本発表では、反語彙主義の立場から名詞化の分析を提案し、大規模コーパスを使用してこれを例証する。最初に、主に British National Corpus からのデータに基づいて、オンラインで新造されるとみられる事象名詞 派生名詞(名詞的動名詞を含む)及び総合複合語を使って語彙主義の問題点を議論する。次に、反語彙主義の代表である「分散形態論」(DM)の視点から(Harley & Noyer (2000), Embick & Noyer (2001))事象名詞

を分析し、同分析が語彙主義の問題点を解決できることを論証する。最後に、DM モデルに基づき名詞化にまつわる語彙挿入システムを検討し、名詞化が文法のどこで行われるべきか確認する。

“Formal versus Encyclopedic Properties of Vocabulary” *The Lexicon-Encyclopedia Interface*, ELSEVIER. “Movement Operations after Syntax” *LI* 32.

「日英語の事象無効化現象」

江連和章

(神奈川県立外語短期大学)

結果達成の解釈が無効化される Event Cancellation (EC) は、無効化を促す統語要素が () 当該節外にある場合と、() 節内にある場合に区別され (例文以下)、それぞれの場合の EC の可否に関して日英語では一貫した異同がみられる。

() *I burned the garbage, but *it didn't burn*.

() I burned the garbage *for ten minutes*.

池上 (1980-1981) 他先行研究の多くは () に着目し、到達点指向性について日英語は言語類型論的に異なる「傾向」を持つとしてきた。本稿では、日英語の EC 現象 () と () に対して一般文法理論による統合的分析を提示する。具体的には Tenny (1994) の直接内項に課される普遍的連結制約に対して、事象計測の必須構成要素に関するパラメーターが組み込まれていることを提案し、当該現象の中核部分は、パラメーター化された連結制約と、それと連動する焦点化操作の諸性質により説明されると主張する。

Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface, Kluwer.

「動詞不変化詞構文：語順と熟語性との かわり」

福井龍太 (筑波大学大学院)

英語の動詞不変化詞構文 (VPC) では、(1-2) のように 2 種類の語順が容認されることが Fraser (1974) 他で観察されている。Gries (1999) に倣い、a の語順を C1 とし、b の語順を C2 とする。

(1) a. ?John threw up the ball. (C1)

b. John threw the ball up. (C2)

(2) a. John threw up the dinner. (C1)

b. ?John threw the dinner up. (C2)

(1a-b) は、「ボールを投げ、そのボールが上方に移動した」という字義的意味を持ち、C2 の語順を好む。一方で (2a-b) は「夕食を吐いた (vomited)」という熟語的意味を持ち、C1 の語順を好む。本発表では、VPC が字義的意味を持つか、または熟語的意味を持つかが C1 と C2 の選択の一因になることを観察する。さらに熟語的であればあるほど C1 がより好まれ、字義的であればあるほど C2 がより好まれることをみる。そして VPC の熟語性は段階的であることを示す。

Fraser, B. (1974) *The Verb-Particle Combination in English*, Tokyo: Taishukan.

Gries, S. Th. (1999) “Particle movement: A cognitive and functional approach,” *CL* 10.

研究発表 第四室 (11月5日午前)

司会 天野政千代 (名古屋大学)

“The Theme Goal Construction in Modern Irish”

牧 秀樹 (岐阜大学)・Dónall P. Ó Baoill
(Queen's University Belfast)

This paper investigates the Theme Goal construction in Modern Irish, as it has not yet been examined in the literature, and elucidates the operations involved in the construction. Irish does not have the Double Object Construction, as found in English, so that the Goal phrase is always realized as a PP. The word order among the Theme NP and the Goal PP is free in some circumstances, but is restricted in the others. In this research, we first present the data that have not been reported, and then extract the genuine properties of the construction by uncovering the interfering factors that conceal them. Based on the properties of the construction found, we argue that Irish possesses the movement operation scrambling, as seen in languages like

Japanese, which distinguishes the word order in the construction in Irish from that in English.

「英語史における競合 (rivalry) の問題について」

秋元実治 (青山学院大学)

競合関係は英語史において絶えず起こっている。古英語における *nimen vs. take* の (Rynell 1948) はよく知られているものである。競合関係は単に語と語との関係にとどまらず、それらの語の持つ体系全体にも影響することである。似たような考え方は「場の理論」にも見られる (詳しくは Ullmann 1964 [1962]: 243-253 参照)。本論はそのような競合関係が動詞, *desire, hope, want, wish* といういわゆる ‘verbs of wanting’ の間でどのように起こり、その後再体系にどのような形で影響を与えたかを考察することを目的にする。

動詞 *hope* と *wish* は古英語に使われていたが、*desire* と *want* は中英語期に Old French と Old Norse からそれぞれ借入された。従って、これら4つの動詞の競合関係が生じるのは1500年頃からである。なお、本論において使用したデータは *The Oxford English Dictionary* on CD-ROM, *The Middle English Dictionary*, Helsinki Corpus 及び Archer Corpus である。

The Rivalry of Scandinavian and Native Synonyms in Middle English Especially Taken and Nimen, Lund. *Semantics: An Introduction to the Science of Meaning*, Basil Blackwell.

司会 奥 聡 (北海道大学)

「Comparative (Sub)Deletion について 比較節における \bar{A} 移動を探る」

吉本真由美 (大阪大学大学院)

比較文には主節と比較節との間で比較される要素が同一である場合 (ia; Comparative Deletion (CD)) と、それが異なる場合 (ib; Comparative Subdeletion (CSD)) が存在する。

(i)a. John invited more men than Bill invited.

b. John invited more men than Bill invited women.

従来この CD/CSD は主に相違点を中心に議論されてきた。本発表ではこれらの統語的特徴を観察しつつ、CD/CSD に対して全く異なる操作を見出してきた先行研究の経験的また理論的な問題点を明らかにし、両者の統語的相違点が生じる理由を探る。具体的には、CD/CSD 共に空演算子移動が起こることを示し、「数の比較」対「程度の比較」という図式で顕在的/非顕在的な移動が見られると主張する。

Kennedy, C. (2002) “Comparative Deletion and Optimality in Syntax,” *NLLT* 20, 553-621.

“Ellipsis in a Single Cycle Theory”

江本博昭 (東北大学大学院)

現在の極小主義の枠組みではフェイズで全ての操作が適用される。そこで、本稿ではこの精神に基づいて、これまでの削除の分析を見直してみる。具体的には、削除がフェイズ主要部に生起する Silence 素性によって駆動されると提案し、削除がフェイズごとに適用されると主張する。そして、 vP -ellipsis (従来の VP 削除) の諸事実が、上記の提案の論理的帰結として導き出されることを示す。また、従来指摘されてこなかった vP -ellipsis の事実も説明されることをみる。さらに Chomsky (2001) の単一サイクルの仮説に従うと、 vP -ellipsis のゆるい同一性の読み (Sloppy Reading) の局所性効果、Sluicing では Sloppy Reading が見られないという特性を説明し、Vehicle Change (素性変え) により説明されてきた現象も、この操作を仮定することなく説明されることを示す。

Chomsky (2001) “Derivation by Phase.”

Chomsky (2005) “On Phases” Ms., MIT.

「日英語の Sluicing 構文と短縮疑問詞疑問文」

長谷川信子（神戸外語大学）

Sluicing 構文というのは、先行する文の不明部分に相当する情報を、後続の文で疑問詞を用いて問いかける強調構文だが、その構文と統語的によく似た性質を持つが、語用的には異なる短縮疑問詞疑問文（TWQ）がある。英語では、その両者は共に、空の TP を持つ疑問文で CP 構造を持つと分析できる。日本語では、Sluicing 構文については、Cleft 構文から派生させる分析が主流だが、TWQ については考察されてきていない。本論文では、日本語の TWQ は、「島の制約」違反を許すことを指摘し、それは Sluicing 構文とは異なり、むしろ英語の Sluicing 構文と同様の疑問詞疑問文の構造を持つと分析することが、統語的にも語用的にも望ましいことを論じる。このことは、統語構造と語用的機能の対応に日英で違いがあり、それが Sluicing 構文と TWQ の構造と派生の違いとして表れていることを示していよう。

研究発表 第五室（11月5日午前）
司会 廣瀬幸生（筑波大学）

「「頻度」概念を用いた間接発話行為の再検討 “Why don't you”構文と「なぜ～しないのか」構文」

森 貞（福井工業高等専門学校）

“Why don't you”構文に関して、もともと [質問] と [行為指示] の2つの効力が備わっていると【多義説】と [行為指示] の効力が [質問] の効力を介して推論され、その過程が習慣化したものであるとする【推論習慣化説】がある。

本発表では、用法基盤モデルの重要概念である「頻度」(効果)を援用して、“Why don't you”の縮約形である“Why not”が [行為指示] の効力しか持たないこと(多義説の反例)、 [質問] よりも [行為指示] の方が先に獲得される傾向にあること(推論習慣化説の反例)の理由を模索しつつ、当該構文の言語的振る舞いに関して包括

的な説明を行う。さらに、日本語の「なぜ～しないのか」構文の効力を検討し、少なくとも言語習得の初期段階においては、直接発話行為と(従来)間接発話行為(に分類されていた言語事象)は、同じメカニズムで習得されている可能性があることを提案する。

Bybee, J. and Hopper, P. (eds.) (2001). *Frequency and the emergence of linguistic structure*. Benjamins.

「日英語における指示の転移と自己表現の文法」

西田光一（東北大学）

英語の再帰代名詞は、I wiped myself off. のような文では主語の人の身体を表すが、Norman Mailer likes to read himself before going to sleep. のような文では指示が転移し、主語の人の自著を表す()。本発表では、後者のように主語の人から分離した異物を表す再帰代名詞の転移用法を応用し、自己表現の道具とされた衣服などの異物は身体に同化し、「人の自己」を表す表現に文法的に同化すると指摘する。例えば「儉約する」の意味のイディオム tighten one's belt では、名詞句 one's belt は数の一致などで再帰代名詞と同じ特徴を示す。日本語にも自己に同化した異物を表す表現があり、例えば「汚れたユニフォームの北島選手」といった着衣を表す名詞句は、「青い瞳のサリー」といった身体部位を表す名詞句と同種の語順の交替を起こす。異物が自己に同化する領域が日本語と英語で違う理由も考察する。

Abush, D. 1989. Reflexives, Reference Shifters, WCCFL 8. Jackendoff, R. 1992. Mme. Tussaud, NLLT 10, 廣瀬幸生 1997. 人を表すことは、日英語比較選書 4.

司会 東森 勲（龍谷大学）

「否定疑問文再考」

花崎美紀（信州大学）

本発表は、否定疑問文に関する2つの現象(1. 日英語には丁寧さに差異があること

が多い 2. 肯定の返答は、英語では肯定、日本語では否定の事実を表すことが多い)について捉え直すものである。

多くの先行研究は、これらの現象を、期待値や真偽値の判断の「傾き」によって説明するが、コンテキストを十分考慮に入れていない、真偽値(期待値)がどちらに「傾いて」いるのか決めかねる用例がある、聞き手による解釈の動的なメカニズムを説明していないなどの問題点がある。

本発表では、

- (1) Bourdieu の practice 理論に則って、否定疑問文は「観察」と「観察に反する期待」を表すと捉え直し、
- (2) その機能を、Ingarden の情報受け取り手からみた解釈の理論を元に分類し直すと、その「観察に反する期待」が何であると聞き手が捉えるかというハピタスが日英語に差異があり、
- (3) そのハピタスの違いが否定疑問文の丁寧度と返答の意味に影響するということを明らかにしたい。

Ingarden, R. (1973) *The Cognition of the Literary Work of Art*. Trans. R. A. Crowley and K. R. Olson / Bourdieu, P. (1977) *Outline of a Theory of Practice*. Trans. R. Nice.

「変項名詞句の意味機能について」

西山佑司 (明海大学)

次の文に登場する名詞句 *the president* の意味機能はそれぞれ異なる。

- (1) *The president is running.*
- (2) *The president is that person.*
- (3) *That person is the president.*

(1) の *the president* は指示的である。(2) は「社長八あの人だ」という倒置指定文の読みをもち *the president* は変項名詞句である。(3) は「あの人八社長だ」という措定文の読みと、「あの人ガ社長だ」という指定文の読みをもち曖昧であるが、措定文読みでは *the president* は叙述名詞句であり、指定文の読みでは変項名詞句となる。本発表では、(倒置)指定文に登場する変項名詞句の意味機能に注目し、これが(2)(3)のようなコピュラ文だけでなく、変化文、潜伏

疑問文、絶対存在文、所有文、潜伏命題文など英語の多様な構文の意味に深く関与していること、それらの構文の意味構造には「指定文の意味構造」という共通の構造が隠れていることを論じる。

西山佑司『日本語名詞句の意味論と語用論』(ひつじ書房)

研究発表 第六室(11月5日午前)
司会 畠山雄二(東京農工大学)

「英語の主題句・Wh 句連鎖における容認度の多様性について」

福本陽介(名古屋大学大学院)

現代英語における主題句・Wh 句連鎖を含む文について先行研究を調べてみると、例えば *I was wondering to Terry what you gave.* と同様のパターンの連鎖を含む文において、容認度が揺れている場合がある。当該の連鎖の容認度には主題句の項・付加詞の区別が関与しているという主張もあるが(Rizzi (1997)), それだけでは上述の容認度の差を説明することはできない。本発表では、現代英語における主題句・Wh 句連鎖について、好まれる組み合わせと語順の一般的傾向を示し、なぜ類似した文の容認度が揺れるのか、その理由を明らかにする。具体的には、容認度の揺れには主題句の範疇(DP/PP)の違いも関係しており、それに応じて主題句の構造的な位置が異なると仮定することにより、容認度の多様性を説明できると主張する。

“The Left Periphery,” in *Elements of Grammar*, Kluwer.

「寄生空所構文における認可の違い」

黒木隆善(九州大学大学院)

英語の寄生空所構文にはその生起位置の違いから主語寄生空所と付加詞寄生空所の存在が明らかになっているのにもかかわらず、従来からこれら2つの寄生空所構文は同一のものとして考えられ、それゆえ統一的な分析が試みられてきた。

本稿では、それらの統一的な分析が、双方の寄生空所における再構築効果の現れ

の点において大きな相違があるということ
を糸口として、それぞれが全く別の現象
であるということを明らかにする。その際、
先行研究で取り上げた Nissenbaum (2000
)と Nunes (2004)の統一的な分析が、実
は個々の寄生空所構文の認可に対して有
効であることを示す。

さらに、主語寄生空所の認可のメカニズ
ムが二重目的語構文の島の現象や、全域的
適用構文の再構築の非対称性に関しても
拡張可能であることを議論していく。

*Investigations of Covert Phrase
Movement*. Doctoral Dissertation, MIT.
*Linearization of Chains and Sideward
Movement*. MIT Press.

司会 木口寛久 (宮城学院女子大学)

「派生とコピーについて」

佐藤英志 (県立新潟女子短期大学)

本発表では、極小主義の基盤概念である
コピー理論の精緻化とその理論的帰結を
論じる。概略、A/A'移動の両方に、コピー
を形成する派生とそうでない派生の2通り
があることを主張する。その際、コピー形
成を次のように派生的に定義することを
提案する。

(1) An item whose unvalued features are all
valued does not leave its copy behind.

この提案により、主に次のような帰結が
得られる。第1に、Nunes (2004)で論じら
れている PF におけるコピー削除と
Chomsky (2001)の Agree による素性削除
システムとの矛盾が解消される。第2に、
A'移動のコピーに関する Lasnik (2003)の
問題点が回避される。再構築効果と数量詞
作用域に関して、A'移動のコピーに課され
る相反する条件を原理的に導く可能性を
論じる。第3に、A'移動が元位置にコピー
を残さない現象の一例として、優位性効果
の消失 (Pesetsky 2000)が連鎖形成に課
される制約から説明できる。

*Linearization of Chains and Sideward
Movement*. “Derivation by Phase,” in Ken
Hale. *Minimalist Investigations in*

Linguistic Theory, Routledge. *Phrasal
Movement and Its Kin*.

“A (More Radically) Derivational Approach to the Reconstruction Effect of Japanese Scrambling”

内芝慎也

よく知られているように、日本語のスク
ランプリングには再建効果 (Reconstruction
Effect)が見られ (Saito 1985, 1992), 従来、
スクランブルされた要素は基底位置に字
義通り再建されると主張されてきた。本発
表では、従来の主張では理論上および経験
上の問題が生じることを指摘し、日本語ス
克蘭プリングの再建効果を派生的統語
アプローチ (Epstein et al. 1998 ; Epstein
1999) の下で検証することにより、同効果
が字義通りの再建を想定せずとも説明可
能であることを明らかにする。本発表で行
う提案は、名詞句の LF 解釈は派生導入後
すぐに行われるというもので (Uchishiba,
forthcoming), Kitahara (2002) と比べ、
より徹底した派生的アプローチを採る。最
後に、本提案に対する経験的問題として、
英語での束縛関係に関する現象をとりあ
げ、解決案を提示する。

*A Derivational Approach to Syntactic
Relations*. OUP. “Scrambling, case, and
interpretability.” In *Derivation and
Explanation in the Minimalist Program*.

シンポジウム A 室 (11月4日午後)

極小主義理論の新展開と歴史言語学： 言語変化における機能範疇の役割

司会 田中智之 (名古屋大学)

1980年代半ば以降の生成文法研究にお
いて、共時的な言語変異に関わるパラメ
ターは語彙部門、特に機能範疇のみに存在
するという仮説が広く受け入れられている。
さらに、この仮説が通時的な言語変異であ
る言語変化についても有効であることが、
最近では Roberts and Roussou (2003)にお
いて詳しく論じられている。本シンポジウ
ムではこのような研究動向を踏まえて、言

語変化において機能範疇が果たす役割について考察する。具体的には、英語史におけるいくつかの統語変化を取り上げて、機能範疇の素性変化と機能範疇の出現という観点からそれらを説明する可能性を探る。その際、機能範疇に関わる極小主義理論の新展開、特に Chomsky (2005) における素性継承、フェイズ、拡大投射原理等に関する提案、および Cinque や Rizzi らが提唱する詳細な機能範疇の階層構造に注目し、それらを言語変化の説明に積極的に利用する、あるいは言語変化の分析からそれらの妥当性を批判的に検討することを試みる。それと同時に、極小主義の理論的視座を用いることによって、新たな言語事実や記述的一般化を見出し、経験面からも歴史言語学に貢献することを目標とする。

Syntactic Change: A Minimalist Approach to Grammaticalization, Cambridge. “On Phases,” ms., MIT.

「主語の認可と機能範疇の素性変化」

講師 槇田裕加（中部大学）

現代英語では、拡大投射原理（EPP）に従うため、規範的な主語位置である [Spec, TP] を義務的に埋めなくてはならない。しかしながら、Roberts and Roussou (2002) 等によって指摘されているように、アイスランド語やドイツ語等の動詞第二位（V2）言語では、EPP の適用は義務的ではない。本発表では、同様の現象が初期近代英語期までの英語においても観察されることを示し、Chomsky (2005) 等によって展開されている極小主義理論の枠組みにおいて EPP の特性を通時的観点から考察する。具体的には、初期近代英語期において EPP が義務的に適用されるようになる過程を観察し、(i) EPP は単に「節は主語を持たなくてはならない」とする原理ではない、(ii) EPP は V2 現象、顕在的な動詞移動、主語への格付与等、様々な現象と深く関わっていると主張する。

“The Extended Projection Principle as a Condition on the Tense Dependency,” Svenonius (ed.).

「目的語の認可と機能範疇の素性変化：目的語転移を中心に」

講師 宮下治政（鶴見大学）

本土スカンジナビア諸言語で観察される人称代名詞の目的語転移が初期近代英語においても可能であったことが、Roberts (1995) によって指摘されているが、その歴史的変遷に関しては、実証的にも理論的にもこれまであまり議論がなされていない。本発表では英語史における人称代名詞の目的語転移の出現時期と消失時期を特定し、Chomsky (2000, 2001, 2004, 2005) の極小主義理論に立脚して、機能範疇の素性変化という観点からその歴史的変遷に対して説明を試みる。

古英語における人称代名詞が接語であることは先行研究において示唆されているが、本発表ではこの立場を踏襲しつつも、Déprez (1994) 等とは異なり、目的語転移に関与する人称代名詞は接語ではないことを示し、その接語性の消失は機能範疇 D の素性変化の反映であると主張する。さらに、英語史における目的語転移の出現と消失は、それぞれ VO 基底語順の確立と動詞移動の消失に起因することを論証する。

“Object Movement and Verb Movement in Early Modern English,” Haider et al. (eds.).

“Parameters of Object Movement,” Cover & Riemsdijk (eds.).

「定形節における機能範疇の出現：文副詞の認可を中心に」

講師 水野江依子（名古屋工業大学）

probably のような文副詞が現代と同様の用法を持つようになったのは初期近代英語期以降であると言われている (cf. Hanson (1987))。このような歴史的発達に関して意味論的・語用論的立場から論じた研究はあるが、統語論的立場から論じた研究はほとんどない。本発表では、機能範疇の出現という観点から文副詞の歴史的発達に対して統語的に説明を与えることを目的とする。

具体的には、Swan (1988) の観察に基づいて、文副詞の中でも純粋な話者指向副詞

のみが初期近代英語期以降に現れたことを指摘する。そして、Cinque (1999)らが提唱する Mod などの機能範疇が文副詞の認可子であり、これらが近代英語期になって出現したために文副詞が許されるようになったと主張する。その際、副詞に関する指定辞分析や付加分析などの従来の分析とは異なり、Chomsky (2005)の極小主義理論の枠組みにおいて、副詞の認可を probe-goal 関係の観点から捉えなおす。

Sentence Adverbials in English: A Synchronic and Diachronic Investigation, Novus. *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*, Oxford.

「非定形節における機能範疇の出現」

講師 田中智之(名古屋大学)

機能範疇の出現に関しては、(i) 既存の語彙範疇が機能範疇へと変化する、いわゆる文法化の事例(Roberts and Roussou (2003)), (ii) 語彙範疇のみから成る構造に新たに機能範疇が創出する事例(Gelderen (1993), Osawa (2003)), という2つのパターンが先行研究において議論されている。本発表では、これら2つのパターンの事例研究として、英語史における非定形節の発達、特にコントロール不定詞節と小節の発達を取り上げ、極小主義理論の枠組みにおいて考察する。その際、英語史研究においてほとんど注目されてこなかった再構成(restructuring)に関するデータを提示する。そして、コントロール不定詞節においては不定詞標識 to の語彙範疇から機能範疇への変化、小節においては叙述を認可する新たな機能範疇の創出によって、これらの非定形節がフェイズとしての位置づけを確立したために、英語史において再構成が消失したと主張する。

The Rise of Functional Categories, John Benjamins. "Syntactic Parallels between Ontogeny and Phylogeny," *Lingua* 113.

シンポジウム B 室 (11月4日午後)

会話の構造と文法：コンテキストにやさしい文法研究の試み

司会 山口治彦(神戸市外国語大学)

これまでの文法研究は、生成文法などのフォーマルな文法理論を中心に展開してきた。そこでは、脳内の規則群を明らかにするために、脳の外にある要素を廃して理論が構築された。しかし、ことばを、脳の外側(つまり実際のコミュニケーション)において生起する現象ととらえるなら、そのようなことばの形式をとらえるためには、フォーマルな文法理論とは異なった研究方法が必要になるはずだ。ことばの形式は発話のコンテキストの影響から無縁ではないからである。本シンポジウムでは、コンテキストにかかわる種々の要因に留意しながら、一定の状況においてことばがなぜ所与の形式をもつのかについて、英語と日本語の例をもとに考えてみよう。このような試みのなかで、従来の文法研究では見過ごされてきた点がいくつか指摘できることと思う。

「話法の4分類と人称的对立」

講師 山口治彦(神戸市外国語大学)

これまでの話法研究が扱うデータは、小説や新聞記事、および体験談などの語りの例に限られ、対話のやりとりにおける引用の例はほとんど無視されてきた。その結果、私たちは話法が本来あるべき姿の半分のみしか眺めてこなかった。本発表では、echo question(を参照)などの対話的な引用形式をも視野に入れて、直接話法、間接話法、自由直接話法、および自由間接話法という従来の話法の4分類がもつ本来の意味を明らかにしたい。[1人称]対[非=1人称]、および[1&2人称]対[非=1&2人称]という人称的对立(を参照)にもとづいて英語の話法は文法化されており、私[1人称]とあなた[2人称]がいて、そして第3者[非=1&2人称]がいるという、会話における発話参与者の相対的な空間的配置が英語話法の形式に反映されていること

を、対話と語りという話法が用いられるときのコンテクストの違いに留意しながら示したい。

Yamaguchi, H. "Echo utterances." Asher (ed.) *Encyclopedia of Language & Linguistics*.

バンヴェニスト「動詞における人称関係の構造」『一般言語学の諸問題』

「体験と知識の文法」

講師 定延利之（神戸大学）

従来の文法研究は、知識伝達をベースにして論じられてきたが、コミュニケーションは「知識の伝達」だけではなく、「体験をやってみせること」抜きには論じられない。本発表は、「聞き手に知識を伝達する場合」と「聞き手の前で体験をやってみせる場合」で文法が異なることを論じるものである。具体的に取り上げる現象例を以下に2つ挙げておく。

(i)たとえば「庭で木があります」が不自然なように、モノ（木）の存在場所は「で」では表せないが、北京旅行から帰ってきた北京体験者なら「納豆パックなら、北京でありましたよ」のように、モノの存在場所が「に」でなく「で」で表せるということ。
(ii)たとえば車が動かない原因をさがしている4人は、原因を発見すれば「あ、サイドブレーキかかっている！」などとは発言できるが、「あ、サイドブレーキかかっていた！」と言えるのは、基本的に、車の運行に責任を持つ運転手にかざられるということ。

定延利之『ささやく恋人，りきむレポーター』岩波書店

「多重文法仮説：英語受動文の考察」

講師 岩崎勝一（国際基督教大学/UCLA）

「多重文法仮説」は、言語使用者のもつ文法をひとつの巨大な構築物ではなく多数の「小文法」により構成されているとする仮説である。「小文法」は違った言語使用場面で活性化される多数の文法形式等のパターンであり、言語使用者は違ったジャンルの言語活動に接し、多種の「小文法」を獲得していく。また、異なる「小文法」

を結合するメタ機能により言語使用者は新しい文法形式等を創造・理解する。本発表ではこの仮説をもとに、英語の「会話」「社説」という二つのジャンルの中に見える受動文を考察する。「社説」にあらわれる受動文が客観化を高めるために用いられるのに対し、「会話」の受動文の多くは主観化を具現化するために用いられる。この差異はそれぞれのジャンルを規定する基本的な機能の違いによるもので、形式主義的な観点からはまったく見落とされる側面である。また会話に現れる社説的な受動文を考察することによりメタ機能の理解を深める。

Hopper, P. 1998. "Emergent grammar." Tomasello (ed.) *The New Psychology of Lg.*

Bybee & Hopper. 2001. *Frequency and the Emergence of Linguistic Structure*.

シンポジウム C 室（11月5日午前）

音声分析ソフト Praat を利用した 音声・音韻研究：入門から最前線まで

司会 菅原真理子（同志社大学）

近年パーソナルコンピュータおよび比較的手軽に利用できる音声分析ソフトの普及により、大掛かりな機材を用いなくても音声実験が可能になった。また、従来は必ずしも実験を伴わなかったいわゆる理論言語学分野（音韻論・統語論・意味論等）でも、発話・知覚実験から得られたデータによってその理論を実証していく手法が広く浸透しつつある。このシンポジウムでは、ネット上で無料ダウンロードが可能な音声分析ソフト Praat (Boersma & Weenik, <http://www.praat.org>) の基本機能の紹介から、それを実際に利用した音声・音韻研究の最前線(utterance-final lengthening の研究, tone alignment の研究, ピッチの知覚研究)を紹介することにより、会員たちが実験系音声・音韻研究の分野に啓発され、彼らの今後の研究領域の拡充に繋がることと期待する。

Boersma, P. & D. Weenink (1992-2006). Praat: A system for doing phonetics by

computer. Available from www.praat.org.

「Praat を用いた音声研究の基礎:tutorial」 講師 菅原真理子 (同志社大学)

この tutorial では Praat を使った音声分析の基本を概観する。Praat は .wav 等の音声ファイルを読み込み、波形とスペクトログラムのウィンドウを生成し、そこで F0 値やフォルマント値、音量、音の長さなどの測定を可能にしてくれる。また、Text Grid ファイルを音声ファイルと共に読み込むことで、波形とスペクトログラムを音節・分節レベルに細分化して segmentation することもできる。さらに Praat の最も便利な特徴は、音響変数の測定をひとつひとつ手で行わなくても、プログラミング言語を駆使したスクリプトを作成しそれを作動させることで、一度に複数個の音声ファイルの音響データの測定と処理を可能にしてくれる点であろう。この点に関して、簡単なスクリプト処理の実例を紹介しながら触れてみたい。また、画像ファイルの作り方、Praat 利用者がネット上で公開している資料等にも言及する。

「日本語とフィンランド語に於ける utterance-final lengthening について (音声の長さに関する研究の方法)」

講師 中井さつき
(University of Edinburgh)

Utterance-final lengthening (発話の終わりに音声長くなる現象:以降 UFL) は英語を含む大多数の言語に見られるが、日本語やフィンランド語等の少数派の言語には見られないという説がある。日本語とフィンランド語の両言語に見られる長母音と短母音の区別が UFL の有無に関係するかどうかを検証した。収集したデータによると日本語にもフィンランド語にも UFL は見られるが、その程度に関しては発話末に特有の声質の変化をどう扱うかによってかなり違った結果が出て来る様だ。検証に使った文章と Praat を使って分析したデータから例を引きながら、音声の長さに関する研究をする際の実問題を幾つか挙げ、

その解決策を提案する。具体的には以下の問題について触れる。(1) 音声の長さに関する実験をデザインする際の基本的注意事項 (2) 長さの測定方法の基本 (3) 測定を容易にする実験材料の選び方 (4) 測定基準が一つに絞れない時の解決策。

「Praat を用いた tonal alignment の 発話研究について」

講師 石原 健 (目白大学)

Tonal alignment の研究はここ 10 年ほどの間に非常に盛んになってきており、さまざまな言語において興味深い研究成果が得られている。tonal alignment は、ごく簡単に言ってしまうと、発話における F0 値とセグメントとのタイミングのことだが、その研究方法はベースとなる理論的枠組みなどにより異なっている。本講演では、まず、tonal alignment の研究における主要な理論的枠組みと実験方法を概説し、さらに、F0 値のパターンをトーンの連続と見なすモデルをもとにした tonal alignment の発話研究および Praat を使った発話データの分析方法について説明する。また、実験のデザインや測定方法について具体的な注意点や問題点を挙げ、それらの解決方法を提案する。

「Praat を用いた日本語イントネーション の知覚研究」

講師 新谷敬人
(University of Massachusetts at Amherst
大学院)

日本語イントネーションの知覚研究 (語彙アクセントが卓立の知覚に及ぼす影響の研究) を刺激音作成と実験実施に関する準備過程に焦点を当てながら紹介する。実験の刺激音は自然発話をもとに Praat に装備された PSOLA と呼ばれる音声合成アルゴリズムを用いて作成した。本講演では、この刺激音作成の手続きを紹介する。また Praat には知覚実験実施用のプログラムも装備されており、これを使ってどのように実際に実験を行ったかについても紹介したい。実験の結果、聞き手は F0 の変動幅

だけに基づいて語の知覚卓立を判断せず、知覚上の卓立を語彙アクセントの有無といった語彙情報に基づきそれを正規化していることが分かった。有核語の大きなF0の変動は知覚上の卓立としては実際よりも小さく算定され、ダウンステップの知覚的な正規化により、有核語に続く語の卓立が無核の語に続く語よりも大きく算定されているということが明らかになった。

シンポジウムD室（11月5日午後）

複合動詞の意味と統語

司会 由本陽子（大阪大学）

日本語のV+Vの複合は非常に生産性が高くその意味関係も多様だが、影山(1993)は、形態統語的ふるまいから、複合動詞が語彙部門で形成されるものと統語部門で形成されるものとに二分されることを示し、分散形態論などとは対立する語形成のモジュール性を主張した。本シンポジウムでは、影山(1993)の立場を推し進めた由本(2005)やFukushima(2005)の主張を前提とし、複合動詞やそれに類する複雑述語形成において付与や格標示がどのように行われるか、また、結合する動詞の選択にはいかなる制約が働くのかといった問題を再検討し、複合語にとどまらず広く複雑述語形成を視野に入れた語形成のモジュール性の妥当性について考える。

『文法と語形成』ひつじ書房。『複合動詞・派生動詞の意味と統語 モジュール形態論から見た日英語の語形成』ひつじ書房。“Lexical V-V Compounds in Japanese: Lexicon vs. Syntax.” *Lg.* 81.568-612.

「機能範疇と複雑述語」

講師 星 宏人（秋田大学）

Chomsky (1995)はConfigurational Theta Theoryを提案し、「構造構築と付与は、構造環境とは無関係に固定して行われる」と主張している。故に、この理論下ではVとvは構造環境に関わらず常に(1)の構造を投射し、ZPは内項、WPは外項として解釈

される。

(1) [_{WP} WP v [_{VP} V ZP]]

本発表では、日英語の複合・複雑述語の研究を通して、「構造構築と付与は構造環境に依存する」と反論する。この提案の背後にある直感は次のことである。構造構築については、i) 語彙範疇は(Mergeにより)、X⁰レベルの範疇しか構築できないが、ii) 機能範疇は、(Mergeにより)必ずXPレベルの範疇を認可する(cf. 影山 1993, Sells 1996)。付与に関しては、i) 語彙範疇はfeature percolationにより、その-domainを自由に拡大し、LCSや項構造のレベルでの融合を可能する(cf. Rosen 1990, Alsina 1992)が、ii) 語彙範疇のfeature percolationは、原則的に機能範疇によって阻止される。

「複合動詞における格標示と付与 統語的複合と語彙的複合の差異」

講師 由本陽子（大阪大学）

影山(1993)が示した日本語の語彙的対統語的という複合動詞の区別について、由本(2005)では主にその意味的側面からこれを支持した。本発表ではこれをさらに発展させ、語彙的複合動詞の場合は、概念構造で合成されるLCSに基づいて統語的素性が決定されるが、統語的複合動詞の場合は、二つの動詞が補文関係を成す統語構造に基づいた付与や格標示がなされることを示す。その根拠として、二つの動詞の素性に不一致があるような複合動詞の格素性決定において、語彙的複合語と統語的複合語とでは違いが見られること(先生を言い負かす vs. パブに行き尽くす)、また、動詞の代わりに事象を表す名詞と結合した構文における項の現れ方も両者の間で違いがあること({敵に夜襲を/*敵(へ)の夜襲を}かける vs. {子に送金を/子への送金を}続ける)などを挙げる。さらに、「声をかける、手を尽くす」といった名詞の特質構造を利用した構文にも触れる。

「日本語語彙的複合動詞のタイプ別生産性」

講師 福島一彦（関西外国語大学）

Fukushima (2005)の提案は、文法関係・非能/対格性・伝統的意味役割などに依存せず、動詞自体が含意する proto-role entailment (Dowty 1991)を利用して、語彙的複合動詞構成要素間の項の対応関係を予測するものである。しかるに、同理論は異なるタイプの語彙的複合動詞を均一的に扱う道具立てとなっており、各タイプ間に見られる生産性の違い TV-TV(77%),IV-IV(15%),IV-TV(7%),TV-IV(1%) は的確にとらえられていない。日本語の基本的な TV・IV の割合は 7:3 であるが、それだけでは上記の比率を説明できない 例えば、TV を伴うものが多くなるはずである。本発表では、Fukushima が提案する複数の制約を「最適化理論風」に再構成し、それらの優先順位の相違から上記各タイプ間で見られる生産性格差の解明の試案を示す。

“Thematic Proto-Roles and Argument Selection” *Lg.* 67.547-619

シンポジウム E 室（11月5日午後）

コミュニケーションはいかに成り立っているか 言語システム・相互行為・身体をめぐって

司会 井出里咲子（筑波大学）

社会言語学や語用論などにおけるコミュニケーションの研究は、これまでに哲学、社会学、人類学等からの着想を得て発展してきた。本シンポジウムは、コミュニケーションが実践される上での諸要素を文化人類学、エスノメソドロジーとしての相互行為分析、言語人類学といった観点から論じ、コミュニケーション研究の新たな方向性を示そうとするものである。

発表では、構成的規則としての言語システムと文化、相互行為としての会話における発言順番と文の関係、異文化のやりとりにおけるジェスチャーや身体利用、会話のリズムと共振関係といった多様なテーマを通じて、言語システム・相互行為・身体

の相互作用の場としてのコミュニケーションが論じられる。また対話者の場（コンテキスト）への理解と関わりあい、慣習的行為とそこに生じる創造性のせめぎあいの中に、人間の知の営み、そして文化としてのコミュニケーションを捉えてみたい。

「言語システムと人格問題」

講師 中川 敏（大阪大学）

ある種の「なぜ」疑問文は、特定の答のみを許可する。ある種の「いかにして」疑問文は、特定の答のみを許可する。ある文を基準として、それに対する「なぜ」の答をその文の「大きな記述」と呼び、「いかにして」の答を「小さな記述」と呼ぼう。日常会話の中で、記述は、「それ以上聞いてはいけない」「聞くことに意味がない」最大の記述、最小の記述をもつ。このように両端を有する説明の連鎖を「言語システム」と呼ぶこととする。

「文化」とは言語システムの束であり、人々は場の関心のあり方に左右されながらこの言語システムを使用していくのだ。この発表では、人類学の古くからの問題、「文明の充実した人格・未開の空っぽの人格」問題を言語システムを使用して解く。そこで示されるのは、「彼ら」を「理解不能の他者」とすることもなく、同時に「人間はすべて同じだ」という陳腐な一般化にも陥ることなく、彼我の距離を測定する一つの方法なのである。

「会話という社会的活動と言葉をめぐるいくつかの考察」

講師 西阪 仰（明治学院大学）

会話は、発言順番が順次替わることによって成立している。ところで、発言順番を構成する単位は、文法的に完結した（雑駁に「文」と呼ばれるような）単位に基づくように思えるかもしれない。しかし、実際の会話では、(1) 文法的に完結していない（ものとしてデザインされた）単位が、完結した発言順番の単位となること、(2) 文法的に完結した単位が、複数の発言順番にまたがる形で産出されることが、観察でき

る。この報告では、それぞれが会話のなかで、あるいは会話に対して何を成し遂げているのかを検討しよう。そうすることで、会話という社会的活動の組織と言葉の配置の関係について、あるいは、実際の会話のなかで言葉を配置するやり方について、いくつかの見通しが得られればと思う。

林「『文』内におけるインターアクション」(串田・定延・伝編『文と発話』); 西阪「複数の発話順番にまたがる文の構築」(同上); 西阪「分散する文」『言語』(2005年4月)

「使用可能なコミュニケーション方略を駆使して 在米日系工場でのやりとり」

講師 砂押由佳子
(群馬県立女子大学)

異文化間のやり取りにおいてお互いの言語の知識が乏しいにもかかわらずコミュニケーションの必要性が高いとき、どのような方略を使用するのだろうか。本稿では、在米日系自動車部品工場における日本人出向技術者とアメリカ人工員間の現場でのやり取りを分析する。やり取りは英語であるが、日本人側の英語力は低く、アメリカ人の日本語の知識は皆無である。この状況下で不完全な言語情報を補うべく、目線、ジェスチャー、身体的位置関係、話題になっている物体の動きなどが最大限に生かされていることをビデオ録画されたやり取りを分析しながら示す。このようなコミュニケーション方略は話者間でやり取りが進む中で創造的に使用されてゆくものである。

「コミュニケーションにおける文化的規範 スモールトークの事例から」

講師 井出里咲子(筑波大学)

日常的な言語行為は、その多くが規範的で慣習化されたコミュニケーション行為の連続体であると同時に、文化的な行動規範として共有されるメタ知識の上に成り立つ行為でもある。本発表では、アメリカ社会におけるコンビニの店員と客、客室乗務員と乗客のやりとりを題材に、会話にお

ける自己開示や平行表現、また協調的に導き出される笑いが、どのように文化的規範として作用しているかを分析する。特に、こうしたコミュニケーションの諸要素が、会話の中にある特有のリズムを生み出し、そのリズムが場の参加者がある文化を反映した場を構築する過程を考察する。またメッセージ・非メッセージレベルのやりとりが、対話者を含めた場の性質を一時的に崩したり、変容させる様子を考察し、メッセージを伝えるというより、むしろ協同的に場を構築するという行為における共有感覚が、コミュニケーションを成り立たせていることに注目したい。

シンポジウム F 室 (11月5日午後)

Empirical Issues in Minimalist Theorizing

司会 斎藤 衛(南山大学)

The Minimalist Program has seen remarkable developments over the last 20 years. Given the minimal apparatus with Merge, Agree and Phase, one could be misguided to believe that the scope of theoretically significant empirical research has become narrower. But a little reflection will reveal that the empirical domain of research has continued to broaden in the midst of minimalist theorizing. The tension between the pursuit of an adequate theory and the explanation of grammatical variations is intensified to the degree that we have never seen before with the extremely restricted model and the wide range of phenomena that the theory has led us to examine. The purpose of this symposium is to discuss some of those empirical issues that have direct bearing on minimalist theorizing. Specifically, we will consider issues related to Case/EPP, binding, and ellipsis.

“Nominative Case licensed by non-finite T”

講師 野村昌司(中京大学)

Chomsky's “On Phases” (2005) proposes that only phase heads trigger operations. Under

this approach, nominative-agreement with T and raising to [Spec, TP] take place by virtue of the phase head C; T inherits the relevant features from C. This means that nominative-agreement and raising to [Spec, TP] do not take place without C. There are some empirical problems to pursue such an approach. I will provide data from Icelandic that seem to show that nominative Case is licensed by T without feature-inheritance from C. Then I will propose that T, not C, is in fact responsible for licensing nominative Case and that not only finite T but also non-finite T can license it. In this process, I will point out that the EPP, i.e. the requirement that [Spec, TP] must be filled, is not universal and should be parameterized.

“‘Conflicting’ Relations and the Derivational Model”

講師 北原久嗣 (慶應義塾大学)

Epstein and Seely (2006) explore a possibility that each transformational mapping transfers the relevant aspects of its output to the phonological component and to the semantic component, which we might call a strongly derivational model of syntax. Under this model, all the syntactic relations required for “LF-level” interpretation are no longer read off from the final form of LF representation; instead, “LF-level” interpretation naturally follows from the derivational process itself. This paper, adopting the strongly derivational approach, presents a preliminary analysis of “conflicting” evidence (pointed out to me by T. Daniel Seely (p.c.)) that the matrix object c-commands into the adjunct for pronominal binding, negative polarity licensing, and Binding Condition C, while this c-command relation does not obtain with respect to parasitic gap licensing.

“Ellipsis and the Theory of Movement”

講師 高橋大厚 (東北大学)

In the transition from the so-called GB theory to the Minimalist framework, a number of assumptions pertaining to the theory of movement that had been considered fairly standard and un-controversial were subjected to critical reexamination. For instance, the status of QR as a movement operation was questioned in part on the ground that it differs in some crucial respects from overt operations. Also, it seemed that the hypothesis that long movement is comprised of a series of short, successive-cyclic movements had to be abandoned partially because the intermediate steps apparently have no morphological motivation. More recently, however, arguments have been provided for those traditional assumptions through the investigation of elliptic phenomena. I will review some of them, including my own, with the aim to show how empirical research on ellipsis has helped solve issues in the theory of movement.

シンポジウム G 室 (11月5日午後)

metarepresentation をめぐって

司会 内田聖二 (奈良女子大学)

確かにヒトがことばを有しているということは他の動物と一線を画する特徴であるが、コミュニケーションそのものは他の動物にも観察されることである。むしろヒトが特異なのは相手が何を伝えようとしているのか、何を考えているのか、を推論しかつそれを伝達する能力をもっていることであるかもしれない。換言すれば、信念や願望などの mental representation を自分以外の誰かに帰属させる能力としての metarepresentational ability の有無がヒトを他の動物と区別する要因と考えられるのである。

心理学や認知語用論における metarepresentation に関する最近の論考は、ヒトのコミュニケーションには記号のコード化と解読だけではなく、それに加えて相

手の意図や願望を読む推論が密接に関与していることをうかがわせるものが多い。本シンポジウムは metarepresentation が言語化のプロセスにどのようにかわり、具現されるのかを考察するものである。

「引用と metarepresentation」

講師 内田聖二（奈良女子大学）

他者の思考、発話を伝えることはとりもなおさず metarepresentation のプロセスが関与する典型的な言語現象である。どれだけ忠実に自分以外の者の考え、ことばを言語的に表現して伝えることができるかということやその形式的な議論がこれまでの引用論の主たるテーマであった。本発表では従来のアプローチを批判的に検討しながら、引用を metarepresentation の視座でとらえることでより大きな言語事実の一部であることを示し、さらに日本語にも言及して、日英語の比較研究に新たな地平を拓く可能性についても考察する。

「語用論、心の理論、metarepresentation」

講師 松井智子（京都大学）

Sperber & Wilson によれば、語用論能力は「心の理論」の一部であり、かつ発話解釈という領域に固有のメカニズムを持つ、生得的な心的モジュールを構成する。近年、心理学の分野では、心の理論が生後 15 ヶ月で機能していることを示唆する研究結果が、生得説を支持するものとして注目を集めている。一方で、3 歳児は、これまで標準的な心の理論発達テストとして用いられてきた「誤信念課題」にパスできないという事実がある。15 ヶ月児の心の非言語的理解と、4 歳以降の言語的理解に違いがあることは、誰もが認めるところであるが、非言語的理解にも metarepresentation を認めるかどうかという点において、異なる理論的立場が存在する。本発表では、これらを概観し、発達、進化の問題も視野に入れつつ、言語と metarepresentation の関係を再考したい。

Sperber & Wilson. 2002. *Mind & Language* 17. Onishi & Baillargeon. 2005.

Science 308. Sperber (ed.). 2000. Oxford. Astington & Baird (eds.). 2005. Oxford.

「エコー疑問文と if 条件文における metarepresentation」

講師 岩田彩志（大阪市立大学）

関連性理論では metarepresentation を文法記述に用いた研究が幾つもなされてきている（Noh 1998, 2000, Papafragou 2000）が、これらの研究の持つ意味合いは理論外の研究者からあまり理解されていないのが実情である。本発表では、英語におけるエコー疑問文と if 条件文を取り上げ、metarepresentation が文法記述にとり必要不可欠であることを示す。いずれの現象も Noh (2000) で分析されているが、metarepresentation 分析により、Noh が気付いているよりも多くのことが説明できる。まずエコー疑問文には通常の疑問文とは異なる特性が幾つもあるが、これらはいずれも metarepresentation の特性として説明できる。また if 条件文でも、従来特異な現象と思われていたものが、前提節が metarepresentation を含むものと分析すればうまく扱える。ただし帰結節が metarepresentation を含むものとして Noh が分析している現象は、実は別の取り扱いが必要である。

Metarepresentation, Benjamins.

2006年9月1日発行

編集・発行 日本英語学会

代表者 千葉修司

印刷所 (株)リョーイン

発行所 日本英語学会

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/elsj/>

〒166-0003

東京都杉並区高円寺南 2-44-5

桐原書店内

電話 (03) 3314-8181

© 日本英語学会 2006